

Title	文章と段落
Author	塚原, 鉄雄
Citation	人文研究. 17 卷 2 号, p.173-204.
Issue Date	1966
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学会
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

文章と段落

塚原鉄雄

文法の単位 国語の文法論的単位として、文章、段落、文、句（文節）、単語と、五種の単位を指定する。最大の単位が文章で、最小の単位が単語である。国語の単位には、そのほか、接頭語や接尾語などの接辞だとか、単語構成の単位として認定される語素だとか、あるいは、音節だとか単音だとかを、指摘しえよう。しかし、それらは、文法論的単位ではない。これら文法論的単位のなかで、文章と文と単語とが、基本的単位である。そして、段落と句（文節）とは、基本的単位を相互に連絡するところの、補助的単位となる。

基本的単位と基本的単位とは、直接に連絡することがない。単語は、句（文節）を構成することによって、文の成分となる。文章の成分は、文によって構成される段落である。つまり、小さな基本的単位は、直接に、大きな基本的単位の成分となるのではない。一個または二個以上の小さな基本的単位が、補助的単位を構成し、それが、大きな基本的単位の成分となる。したがって、補助的単位とは、基本的単位によって構成され、基本的単位の成分となる単位であるといえよう。

基本的単位単語は、補助的単位句（文節）を構成する。補助的単位句（文節）は、基本的単位文の成分となる。補助的単位段落は、基本的単位文によって構成され、基本的単位文章の成分となるわけである。

文法論の部門は、基本的単位によって区別する。すなわち、文章を対象とする文章論、文を対象とする文論、単語を対象とする単語論ということになる。そして、補助的単位は、基本的単位の組成と構造とを、説明するための材料となる。

段落は、文章の組成構造を説明し、句(文節)は、文の組成構造を説明するための、それぞれ、材料である。

基本的単位単語の組成構造を説明する材料として、語素の概念を、設定することが可能であろう。^(註一)だが、語素は、文法論の範疇から排除される。それは、語彙論として統合される、単語構成論の領域に所属する。

文法論には、言語の内面的構造を対象とする部門と、言語の外面的統合を対象とする部門とがある。すなわち、形態論と統語論とが、それである。いずれにしても、組織的な体系において、認識し理解しようとするのが、文法論の基本的な方法である、しなければならない。ところが、単語の構成は、個別的に究明するのでなければ、全般的な認識に到達することは、極度に困難である。究極的には、不可能といってよい。部分的な体系化は、可能であろう。しかし、その体系を、全体的に適用するとしても、不可能でなければ、無意味である。

でなければ、文法論という体系とは、異質の体系となるに相違ない。文法論の体系は、生態論的観点から組織される体系である。だが、単語構成論には、発生論的観点の導入を、拒否しえない。拒否しえないばかりか、積極的に導入しなければならなくなる。もし、生態論的観点に限定して、単語構成論を構成しようとするならば、それは、それなりに重要な意味な荷担するけれども、いわゆる語源俗解 *Folk-etymology* と、逡巡するところがないであろう。

文法論は、現在を研究対象として、現在の現実が、生態論的に体系化されなければならない。文法史というものは、各時代の現在を、史的座標において把握することによって成立する。史的連続性とは、各時代の現在といった断絶を、史的論理によって、連絡することから獲得される認識である。歴史的観点と発生論的観点とは、概念的に峻別されなければならない。

生態論的観点と歴史的観点とは、矛盾するところがない。言語の歴史性を前提とするとき、生態論的観点は、究極的に、歴史的観点に包摂されるはずである。だが、発生論的観点は、現在を研究対象とするとしても、現在の現実には、過去の痕跡が指摘され、現在の過去——現在における過去が、その対象とされる。換言すれば、現在の現実が、直接に対象化

されるのではない。過去において把握された現在が、対象とされるのである。

このことは、強調して特筆しておかなければなるまい。通行の文典が、しばしば、この錯誤を、侵犯しているからである。一例を指摘しておく。会話表現を引用する場合に、会話表現に前置して、使用される「いはく」「のたまはく」の形式がある。通常、これらの形式については、その構成が、語源論的に、あるいは、語構成論的に説明されるだけである。単語論的にはその品詞を、構文論的にはその機能を、それぞれ、規定することが、文法論の使命であらう。しかるに、多数の文典は、発生論的観点からする単語構成を、論究することに終始して、その使命を放擲している。——明白に、観点の混同、方法の錯乱が、そこには看取されるのである。

こういった立場を基盤として、文法論の範疇から、語素の概念を排除する。

機能と形態 言語研究の単位は、単位認定の方法からいえば、発見された単位でなく、措定された単位である。そして、単位概念の種類からいえば、質的単位であって、量的単位でない。言語の単位は、質的統一体としての全体概念である。

——このことを、明確に規定したのは、時枝誠記博士であった。^(註二)そして、その見解は、文法の単位を吟味する場合に、継承されなければならない。

ところで、文法の単位が質的単位であるとは、それが、形態的に規定されないで、機能的に規定されることを、意味するといえよう。

「三」と「角」とが、それぞれ、一単語と認定されるにも拘わらず、「三角」が、一単語と認定されるのは、形態的観点から首肯することに、困難がある。一単語「三」と一単語「角」とが合体して、一単語「三角」を構成している。発生論的にも、また、構造論的にも、それは、明白であるに相違ない。

形態的観点からすれば、「三角」の「三」と「角」とは、それぞれ、一単語の「三」と「角」とに、相違するところがない。しかも、この場合、両種の「三」と「角」とには、意味の基本的な相違も、認知しがたいのである。「三」や「角」

に対応して、「三角」が、同様に一単語であるのは、その形態的な構成とは、別種の次元で規定される原理に、基礎づけられているからである。数量的単位でなく、実質的単位であるから、一に一を加算して、その累計が、やはり、一であるという事態が、現出するのである。

ところで、文法の単位が、質的単位であるとして、その単位の実質を形成する内容が、吟味されなければならない。そこで、卑見によれば、文法的単位の実質を形成するのは、文法的機能である。——そのように規定したい。

例示した三者が、いずれも、一単語と認定されるのは、それら三者が、その文法的機能を具現することにおいて、同質的であるとする認定を前提として、肯定される事実である。無論、ここにいる同質とは、この場合、単語としての文法論的機能と、いうことでなければならない。「三角」という言語が、「三」や「角」とともに、一単語と認定されるのは、それが、文法的機能において、「三」や「角」と、同質の機能を具有し、また、同質の機能をしか具有しない、ということである。

対象の質というものは、一般的に、主観的に認定される。もっとも、ここにいう主観は、独断または独善と、峻別されなければならない概念である。歴史と社会とに基礎づけられた主観は、独断または独善と交叉する、単なる主観ではない。それは、客観性を媒介として成立する。発生的に規定すれば、個別的な主観でしかないとしても、生態的に観察すれば、独断もしくは独善と絶縁して、客観的な普遍性を獲得する。

別言すれば、人文科学の対象とする客観性とは、そういった意味での主観性でしかないのである。そこで、その意味での主観性を、主体性と呼び、その意味での主観的を、主体的と称することは、文辞の弄玩ではない。とすれば、単語の認定は、それが質的単位であるから、主体的に実施されることとなる。

そこで、文法の単位は、言語主体の、主体的に実施する実質的な認定であると、規定してよい。しかしながら、問題は、それで、解決するわけではないのである。

単位の認定が、主体的な、実質の認定であるとして、言語の行動主体には、それで、支障がないであろう。言語主体が、歴史と社会との現実立脚して、その行動を基礎づけるとすれば、その認定が、直観的印象として成立しても、客観性を獲得しうるはずだからである。だが、言語を研究対象とするとき、それが、可能であるかどうか。また、それが可能であるとしても、その認定の妥当性を、奈辺に求尋しうるのか。

言語は、対象化されるとしても、究極的に、主体的行動として対象化されなければならない。音声音を音と区別し、文字を線と区別するのは、主体的な立場を採用して、はじめて可能となる。——そのことは、時枝理論の、常時、強調するところである。だが、主体的ということが、主観的ということでないとするならば、主体的であることの保証が、客観的に提示されなければならない。

でなければ、研究の客観性を、方法として定着することが、不可能となる。その意味では、現在の言語を対象としても、過去の言語を対象としても、科学研究を指向する場合には、逕庭がないのである。

そこで、その客観性を証明するのが、言語的機能である。文法論の部門では、文法的機能ということになる。「三」と「角」と「三角」とが、いずれも、一単語と認定されるのは、それらが、それぞれ、質的統一体として、主体的に認定されるだけではない。そのことは、単位認定の必要条件である。だが、十分条件として、それらの文法的機能の一致することとが、確認されなければならない。

この必要条件と十分条件とを充足することによって、言語の単位は、科学的に措定されるのである。

したがって、文法論と音韻論とが、概念として対立するならば、文法論的機能と音韻論的機能とは、別種の機能である。すなわち、言語の単位という総合概念に統合されるとしても、文法論の単位と音韻論の単位とは、その措定を基礎づける条件が、別種なのである。だから、単語という術語を使用するとしても、文法論の単語と語彙論の単語とは、概念の外延と内包とに、異同がある。

とすれば、単位認定の十分条件は、単位認定の必要条件に、修正を要求することがありうる。言語行動の実践は、主体的立場だけで成立しうる。しかし、言語行動の実践は、主体的観点と客体的観点との止揚として成立する。しかし、そのことは、主体的観点を放棄をも、客体的観点を優越をも、意味するものではない。

実質的認定と機能的認識とは、両者を変数とする函数関係を、構成するのである。前者は、後者の保証することによって、単位の学的認定を基礎づける。そして、また、後者は、前者を前提とすることによって、単位の学的認定を基礎づける。

単語を具体的としたが、このことは、言語の単位一般に、適用しうるし、また、適用しなければならない。無論、文法論の単位も、その例外ではないのである。

抽象と部分 文法論の単位を、文章、段落、文、句、単語と措定するとき、最も具体的な単位が文章で、最も抽象的な単位が単語である。すなわち、この配列は、より具体的な単位から、より抽象的な単位への順序を呈示するといえよう。

ここで、蛇足を挿入しておこう。抽象と具体とは、対立概念である。しかし、それは、相対的な対立概念であって、絶対的な矛盾概念ではない。だから、抽象と具体とは、厳密に言えば、「に對してより」という修飾語が附随するはずである。抽象と具体とは、相対的な段階性がある。^(註三)したがって、「最も」と称するのは、文法範疇という限定を前提として
いる。

さて、段落は、文章を抽象して措定される単位である。段落を抽象して、文の単位を措定し、文を抽象して句、句を抽象して単語と、抽象次元を高度化することによって、漸次、それぞれの単位を、措定するのである。この原理は、「花が咲く。」「花を見る。」「花を植える。」「桜の花が咲く。」「梅の花が散る。」などの文から、「花が」「花を」の句を抽出し、さらに、これらの句から、「花」という単語を抽出することで、具体的な実例を提示しうる。

抽象次元が、高度化するにつれて、「花」の概念も、また、抽象度を加重するのである。だとすれば、俗称に、大きい

単位といい、また、小さい単位というのは、抽象次元の段階を意味する。具体度の濃厚な単位が、大きい単位であり、抽象度の濃厚な単位が、小さい単位である。

その意味で、文章論は、構文論よりも、具体的な次元で成立し、単語論は、抽象的な次元で成立する。

ところが、単位の大小には、それとは、別種の意味がある。抽象と具体との関係のほかに、全体と部分との関係をも、意味するのである。

実例で説明しよう。「花が咲く。」という文は、「花が」という部分と、「咲く」という部分とから構成されている。とすれば、文という全体は、句という部分から構成される。そして、「花が」は「花」と「が」とで構成され、「咲く」は「咲く」だけで構成される。すなわち、句は、単語から構成される。

ここでは、文を全体として、その全体を構成する部分としての句、および、句を全体として、その全体を構成する部分としての単語が、それぞれ、指定されることになる。その場合、全体としての文と部分としての句、全体としての句と部分としての単語といった関係が成立する。これらの全体と部分とに、抽象次元の格差は存在しない。

とするならば、文法論の単位は、抽象と具体との関係で指定されることと、全体と部分との関係で指定されることと、二重の性質を具有するわけである。したがって、単語論で対象化される単語と、文章論で対象化される単語とでは、抽象次元に格差がある。そして、文章論で対象化される単語と、構文論で対象化される単語とにも、抽象次元に格差がある。

すなわち、文法論の単位には、二重性が存在する。だが、二重性の存在は、両者の混淆を容認するわけではない。むしろ、文法論の現状は、この二重性が、明確に認識されないで、安易に混同されていることに起因するかに推測される。

この二重性は、一見、複雑のようではある。けれども、日常茶飯の行動に、その類例が鮮少でない。人間の顔面について論議するのは、人体から、顔面だけを抽象化しているのである。すなわち、その場合、顔面は、抽象としての単位となる。ところが、何某の顔面について論議することがある。その場合、顔面は、何某の部分である。すなわち、部分として

の単位である。そして、常識を具備する人間は、直観的に、両者を混同しない。

抽象としての顔面を対象とするとき、何某の顔面は、その事例でしかない。部分としての顔面を対象とするとき、何某の顔面は、その対象である。ここにいう、「顔面」を「文法論の単位」と、「何某」を「表現」と、それぞれ、交換するとき、ここにいう二重性の意味が、的確に理解されるであろう。

文章の構造 実際の文章は、多種多様に構成される。文章構成の形式は、文章の数だけあるともいえよう。しかし、それらを分析して整理すると、単純な基本形式として理解することが可能である。

それは、人体模型図のようなものである。地球上に棲息する人類は、その起源から算定すれば、何百億になるか、想像がつかないであろう。しかし、その身体の構造は、二枚の模型図で説明しうるはずである。男性の人体模型図と、女性の人体模型図とがあれば、人体の構造は理解しうるであろう。

もっとも、人類の身体には、個人差がある。微視的かつ厳密に規定すれば、人体の構造には、人類の員数だけの種類があるだろう。しかし、その基本的な構造は、二枚の模型図があれば、十分に説明しえよう。人体のなかには、心臓が右胸にあったり、胃袋が切除してあったり、人体模型図に合致しないものも少なくない。けれども、そういった特殊な構造も、基本的な模型図と比較することによって、その特殊性を理解し、説明することが、可能となる。

文章のなかには、文章構成の基本形式に、合致しないものもある。けれども、そのような文章の特殊性は、文章構成の基本形式と比較することによって、明解かつ確実に把握しうる。無論、大部分の文章は、基本形式で理解することが、可能である。だから、文章構成の基本形式を設定することは、それに合致しない例外があっても、有効であるといえてよい。

さて、文章の構成は、細分すると六種の形式に分類することが妥当であろう。この六種の形式は、個別的に設定されるのではない。体系的な組織のもとに、論理的に整理して理解しうるのである。

文章を、構造のうえから吟味すると、まず、大別して、二種に分類することが可能である。

第一種の文章は、文章を大きな段落に区分するとき、文章の要点となる事柄を叙述する段落と、要点の説明となる事柄を叙述する段落とに、分類しうる文章をいう。

この形式の文章は、二段型文章と三段型文章とに分類する。文章の要点となる事柄を叙述する段落が一個である文章が二段型文章である。三段型の文章とは、文章の要点となる事柄を叙述する段落が一個で、要点の説明となる事柄を叙述する段落が二個の文章か、あるいは、逆に、前者が二個で、後者が一個の文章である。

第二種の文章は、文章を、大きな段落に区分するとき、文章の要点となる事柄を叙述する段落と、要点の説明となる事柄を叙述する段落とに、分類しえない文章である。段落が列举される文章だから、第二種の文章を、列举型文章と呼んでもよい。

とすれば、第一種の文章は、統合型文章と名づけよう。統合に、二段型統合と三段型統合との区別があるわけである。そこで、説明の便宜から、文章の要点となる事柄を叙述する段落を、統合段落と略称し、要点の説明となる事柄を叙述する段落を説明段落と略称しよう。

統合型文章 統合型文章のうち、二段型文章は、統合段落、説明段落という順序で構成される、演繹型文章と、説明段落、統合段落の順序で構成される、帰納型文章とに分類する。

①「実例一」夏は夜。月②のころはさらなり。やみも、なほ。ほたるのおほく飛びちがひたる。また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くもをかし。雨など降るもをかし。

(『枕草子』第一段)

実例一の文章で、統合段落は、第一段の「夏は夜」という、筆者の主張である。第二段は、第一段の主張を理由づける事柄を叙述している。すなわち、説明となる事柄の叙述が、第二段である。

このように、演繹型文章の構造は、趣旨、主張、決意、結論、要旨、概括など、文章構成のうえで中心となる統合段

落の事柄を、説明する事柄の叙述である説明段落が後続する。そして、この逆形式で構成される文章を、帰納型文章という。

实例二は、帰納型文章である。第一段が説明段落で、第二段が統合段落である。

〔实例二〕世の中の物字ぶともがらを見るに、みなひききところを経ずしてまだきに高きところのぼらむとするほどに、ひききところをだにうることを能はず。まして高きところはうべきやうなければ、みなひがことのみすめり。このむねを忘れず、心にしめて、まずひききところよりよくかためおきてこそ高きところにはのぼるべきわざなれ。

(「玉かつま」)

第一段では、世間一般の学問する態度を叙述し、第二段では、第一段で叙述した事実を理由として、筆者の意見を開陳している。

統合型文章のうち、三段型文章は、一元型文章と二元型文章とに分類する。

一元型文章は、統合段落を中間として、その前後に、説明段落が位置する形式の文章である。实例三は、一元型文章である。第一段と第三段とが、説明段落で、第二段が統合段落である。

〔实例三〕翁が京に住みつく時、軒向ひの村瀬嘉右衛門といふ儒学者が、「京は不義国ぢやぞ。覚悟して。」と言はれた。十六年住んで、又一語を加へて、不義国の貧国ぢやと思ふ。二百年の治世のはじめに、富豪の家がたんとたつたけれど、皆、大阪、江戸へ金を吸ひ取られたか。それでも、家柄をいうてしやちこはることよ。貧と薄情のほかには、なるべきやうなし。山河花世鳥虫のほかは、あやしきと思つて住んで居る。

(「胆大小心録」二二)

二元型文章は、説明段落を中間として、その前後に、統合段落が位置する形式の文章である。両脚によって支えられる、アーチを連想させる形式といえよう。实例四は、二元型文章である。第二段が説明段落で、第一段と第三段とが、統合段落となつてゐる。

〔实例四〕何事も、入りたたぬさましたるぞよき。よき人は知りたることとて、さのみ知りがほにやはいふ。片ゐなかよりさし出で

たる人こそ、よろづの道に心得たるよしのさしいらへはすれ。されば、世に恥つかしき方もあれど、みづからいみじと思へるけしき、かたくななり。よくわきまへたる道には、必ず口重く、問はぬかぎりは、いはぬこそ、いみじけれ。〔「徒然草」七九段〕^③

第一段と第三段とは、結局、同じ事柄の叙述である。ただ、第一段では、一般的な態度について叙述し、第三段では、焦点を集約して、発言の態度に限定した叙述となっている。だが、発言の態度は、一般的な態度に包摂される。一般的な態度の、具体的な限定であり、具体的な事例である。したがって、第三段は、第一段の内容を、具体的に確言したことになる。

このように、二元型文章では、第一段と第三段とが、同一の内容となる。ただ、把握の方向に相違があったり、表現の方法に異同があったりするから、注意が肝要であろう。

列举型文章 列举型文章の段落には、統合段落と説明段落との区別がない。事柄を、段落に整理し、その段落を、順序だてて列举する形式の文章が、列举型文章である。

さて、列举型文章は、並列型文章と追歩型文章とに分類される。これは、段落を列举する方法の種類を基準とする分類である。

〔実例五〕ある人、法然上人に、^①「念仏の時、ねぶりにをかされて、行をおこたりはべること、いかがしてこのさはりをやめはべらむ。」と申しければ、^②「目のさめたらむほど念仏したまへ」とこたへられたりける、いとたふとかりけり。また、^③「往生は一定と思

へば一定、不定と思へば不定なり」といはれけり。これもたふとし。また、「うたがひながらも念仏すれば往生す」ともいはれけり、これもまたたふとし。〔「徒然草」三九段〕

実例五は、並列型文章である。この文章は、大別して、三個の段落に区分しえよう。文章の筆者は、「たふとし」と感嘆した事柄を、三個の段落に整理して列举している。このように、一定の方針で段落を列举する文章を、並列型文章とい

う。

①「実例六」ぬまじりといふ処も、すがすがと過ぎて、いみじく煩ひ出でて遠江にかかる。②小夜の中山など越えけむほども覚えず。いみじく苦しければ天竜といふ河のつらに、仮屋つくり設けたりければ、そこにて日頃すぐるほどにぞ、やうやうおこたる。

（『更級日記』）

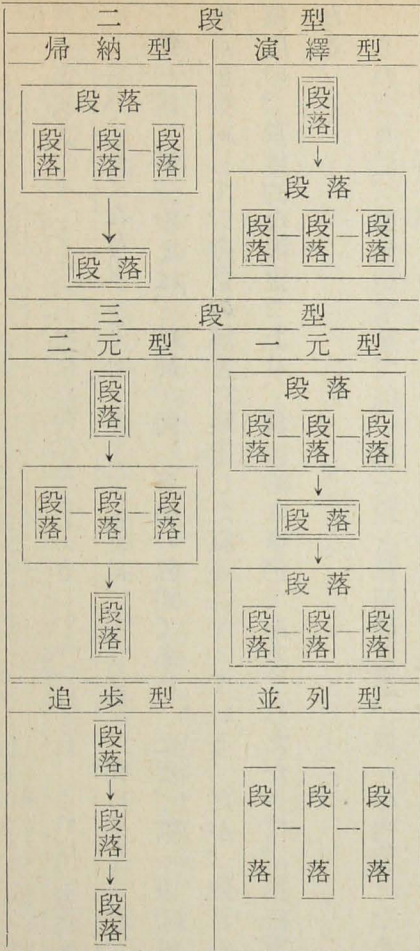
事例六は、追歩型文章である。この文章は、三段に区分しうる。三個の段落は、文章の筆者が経験した事柄を、経験した順序に従つて、整理し列挙してある。このように、時間の順序で段落を列挙する文章を、追歩型文章と呼ぶ。

すなわち、並列型文章の段落配置は、空間的であつて、論理的である。そして、追歩型文章の段落配置は、時間的であつて、即物的である。——そのように理解してもよい。

實際の文章は、複雑に構成されている。しかし、その基本的な骨格は、これら六種の基本形式のうち、どれかに相当するはずである。文章を吟味する場合には、装飾的な部分を除去して、基本的な構造を、確実に把握することが、先決要件

統 合 型 文 章

== 列 挙 型 文 章 ==



第一圖

となる。装飾的な部分は、それが解決してから吟味すればよい。そうすれば、文章は、六種の基本形式で、その構成を適確に理解できる。参考までに、文章構成の基本形式を、模型図にして整理しておく。第一図がそれである。

ここに提示する文章構成の基本形式は、後述するように、段落構成の基本形式でもある。そこで、実際の文章は、これら六種

の基本形式が、重層的に編成されることによって、具体的に構成されることとなる。

主題と段落 文章とは、誰か（言語主体S II 話し手・書き手）が、誰か（言語主体R II 聞き手・読み手）に対して、何か（主題）について、何か（素材）で、何か（意図）を表現する、具体的に完結した統一体としての言語をいう。

すなわち、主体、主題、素材、意図が、文章の成立する基礎条件となる。これらの条件を除外して、文章は成立しない。したがって、文章の理解には、これらの基礎条件を、正確に把握しないと、誤解におちいる危険がある。また、文章の創作には、これらの基礎条件を、確実に把握しないと、混乱を避けられない。

〔実例七〕君待つとわが恋ひをればわが屋戸のすだれ動かし秋の風吹く

〔万葉集〕四・四八四。額田王

これは、和歌であるが、文法でいえば文章である。そこで、この文章の話し手は、この和歌の作者である額田王ということになる。聞き手は、明瞭でないが、不特定の人物と見てよからう。

主題は、天智天皇を思慕する作者の心情である。ということ、この和歌には「近江天皇を思ひて作る歌」と、あふみのすめらみこと 題詞があつて、明白に規定されている。しかし、そんな題詞はなくても、男性を思慕する心情について、表現した作品であることは、容易に推定できるに相違ない。

この文章の素材は、「君待つとわが恋ひをればわが屋戸のすだれ動かし秋の風吹く」と表現されている事柄である。そして、意図は、風物に託して慕情を表現するにあるといえよう。

素材は、文章を構成するうえで、選択され、整理される。選択され整理された素材は、主題と意図とによって、完結した統一性を賦与される。完結し統一した素材を、言語に表現したものが、文章における段落である。

文章は、一個または二個以上の段落から構成される。そして、段落は、一個または二個以上の段落（小段落）から構成される。最小の段落は、通常、一個の文であるから、段落は、一個または二個以上の文で、構成されるといつてよい。

例示した額田王の作品は、一個の文章が、一個の段落から構成されている。そして、その段落は、形態からいえば、一個

の文である。だが、このように単純な場合は、むしろ、稀有である。

〔実例八〕雀の子。そのけそこのけ。お馬が通る。

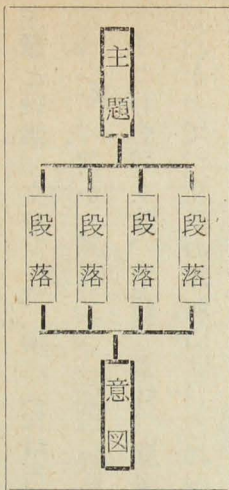
(小林一茶)

この文章、一茶の発句は、雀の子について、作者の愛情を吐露したものである。すなわち、文章の主題は、雀の子であり、その意図は、愛情の表白である。「雀の子」は、この発句の第一句として表現されている。言語に表現されたものは、素材であるから、この文章で、雀の子は、主題と素材とを兼務しているわけである。

ところで、一茶の、この文章は、二個の段落で構成される。すなわち、第一段は、「雀の子」で、これは、主題を提示し、主題を提示することによって、聞き手である雀の子に、呼び掛けている。ここで、雀の子は、主題と素材と主体と、三役を兼務することになる。

第二段は、「そのけそのけ。お馬が通る。」である。この段落は、聞き手に命令することによって、主題について、話し手の要求を叙述している。なお、この第二段は、二個の小段落に区分され、第一小段落は、主題についての要求、第二小段落は、要求の理由を叙述する。

そこで、この文章は、統合型文章のうち、一元型の演繹型であることが判明するであろう。統合段落は、第二段ということになる。



第二図

ところで、このように吟味すると、それぞれの段落が、主題によって統一されていることに、気づくであろう。換言すれば、主題について、話し手が、いろいろの事柄を整理し、その整理した事柄を表現したのが、それぞれの段落である。したがって、段落は、主題の展開であり、段落の順序は、主題の展開する方法であると理解してよい。

というわけで、段落を設定し理解することは、それぞれの段落が、どんな事柄を表現するかを、的確に把握するだけでは、不十分である。それぞれの段落

が、主題と、どんな関係を構成するか、——主題と段落との関係を、確実に把握することが、肝要となる。

主題と段落との関係とは、段落が、主題に対して、どんな役割を、果たしているかということである。すなわち、例示すれば、「前置き」「提示」「引例」「比喩」「証明」「補足」「添加」「言い換え」「比較」「反論」「解説」「批評」

「要求」「期待」「強調」「結論」「趣旨」など、そのほかにも、いろいろの場合が想定されるであらう。

ただ、主題は、無限に展開するのではない。主題の展開は、意図を目標としてなされる。したがって、段落は、主題を展開させて、意図に集中する。第二図に模型化したように、段落が、主題と意図とを媒介し、主題と意図は、段落を統一するわけである。だから、主題と段落との関係を把握するのに、意図との連関を看過しえない。

段落と段落 主題と、それぞれの段落との関係とを、確実に把握することは、その文章が、文章の基本的な形式のうち、そのどれに該当するかを理解することになる。ただ、その作業は、解釈の領域に所属し、文法論の範疇ではない。

文章の内部的な構造を把握することは、文法論の課題である。それには、段落と段落との関係を、説明する必要がある。段落相互の関係を理解することによって、それぞれの文章が、どのような展開をしながら、どのような形式によって統一されるかを、正確に理解しうる。

段落相互の関係は、一見、複雑のようである。しかし、整理してみると、八項で説明することが可能となる。この八種を、段落相互の基本関係と呼ぼう。

段落相互の基本関係は、段落の頭初に位置する接続詞または指示語によって、把握しうる。段落相互の基本関係は、段落の頭初に位置する接続詞または指示語によって、規定されるといってよい。

しかしながら、ここに、二つの留意すべき事項がある。第一に、段落の頭初に、必ずしも、接続詞または指示語が位置するとは、断定できないということである。現代の文章でもそうだが、古典の文章では、接続詞や指示語の使用が寡少である。

したがって、具体的な作業の方法としては、対応する接続詞または指示語を補充して、吟味し、検討しなければならぬ。もっとも、その場合、古典の文章だからといって、古典語の接続詞や指示語を補充する必要は、いささかもないのである。目的は、段落と段落との論理的関係を、確実に把握すればよい。だから、現代語の接続詞や指示語で考察すれば、それで十分だといえる。一例で検討してみよう。

〔実例九〕君や来しわれや行きけむ思ほえず夢かうつつか寝てかさめてか

〔古今集〕十三・六四五

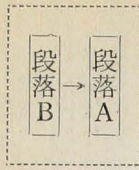
まず、段落に区分してみる。最小の段落は、一文から構成されるのだから、結局は、文に区分することになる。そして、それらの段落と段落とを結合するのに、適切だと判断される接続詞または指示語を、想定してよい。

君や来し（ソレトモ）われや行きけむ（ナゼナラ）思ほえず。（ダトスレバ）夢かうつつか。（スナワチ）寝てかさめてか。

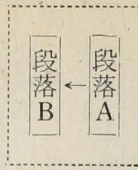
ここで、留意すべき第二の事項を、指摘しておかなくてはなるまい。この実例で、「ソレトモ」という接続詞は、「われや行きけむ」という段落の頭初に位置して、「君や来し」という段落と、「われや行きけむ」という段落との関係を表示している。ところが、「ナゼナラ」は、「君や来し。われや行きけむ」と、「思ほえず」との関係を表示する。また、「ダトスレバ」は、「君や来し。われや行きけむ。思ほえず。」と、「夢かうつつか。寝てかさめてか」との関係を表示している。

つまり、段落の頭初に位置する接続詞や指示語は、その接続詞や指示語の所属する段落だけでなく、所属する段落を含む段落をも関係づけることがある。また、それらは、所属する段落の直前の段落だけでなく、直前の段落を含む段落を関係づけることがある。常に、直前の段落と所属する段落とだけを、関係づけると、限定できない。要約すれば、段落の頭初に位置する接続詞または指示語には、機能領域というものがあり、その機能領域は、所属段落や直前段落を超越することがある、——そういうことである。

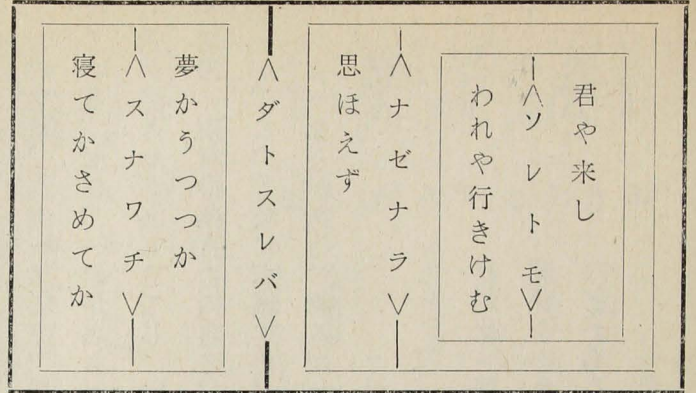
そこで、この実例を、段落相互の関係から図示すれば第三図のようになる。このように、段落相互の関係を確実に整理



第五図



第四図



第三図

すれば、文章の形式も、正確に理解することが出来る。統合型文章のうち、二段型文章で、帰納型文章であり、説明段落と統合段落との区別も、明瞭に看取しうるに相違ない。

段落の関係 さて、こういった段落と段落との関係は、八種に分類して整理することが可能である。

① **順接** 前行段落Aを受けて、その内容を、後続段落Bが展開させる関係をいう。段落と段落との結合は、順当であり、前行段落Aを、原因、理由とすれば、後続段落Bは結果、結着となる。この関係を表示するのには、「ダカラ」「シタガッテ」「ダトスレバ」などがある。第四図が、その模型図である。

〔実例一〇〕雪のうちに春は来にけり。（シタガッテ）うぐひすのこほれるなみだいまやとくらむ。

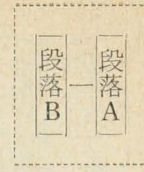
〔古今集〕一・四。藤原高子

② **解説** 前行段落の内容に対して、後続段落Bで、その事由を説明したり、補足したりする関係をいう。前行段落Aを、結果、結着とすれば、後続段落Bは、原因、理由となる。この関係を表示するのには、「ナゼナラ」「トイウノハ」「タダシ」「モットモ」などがある。第五図が、その模型図である。

〔実例一一〕君ならでたれにかみせむ梅の花。（ナゼナラ）色をもかをも知る人ぞ知る。

〔古今集〕一・三八。紀友則

③ **前提** 前行段落Aの内容が、後続段落Bの内容に必要な事柄であり、前行段落Aの内容が存在することによって、後続段落Bの内容が成立する関係をいう。この関係を表示するのには、「ト」「ソ



第六図

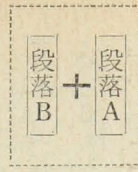
コデ」「ガ」などがある。第六図が、その模型図である。

〔実例一二〕秋の野に道もまどひぬ。(ソコデ) 松虫の声する方に宿や借らまし。〔古今集〕四・二〇二

④累加 前行段落Aの内容に、後続段落Bで、別の内容を累加する関係をいう。添加、並列、序列、追加、付随などと呼ばれるものは、いずれも、この範疇に所属する。この関係を表示するのには、「ソシテ」「ソレカラ」「ソノウエ」「マタ」「ナホ」などがある。第七図が、その模型図である。

〔実例一三〕君が名もわが名も立てじ。難波なるみつともいふな。(マタ) あひきともいはいはじ。

〔古今集〕十三・六四九



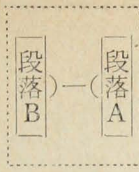
第七図

この文章、実例一三には、掛詞がある。「みつ」は地名の御津に、動詞「見る」の連用形と助動詞「つ」の終止形とを掛けている。なお、「君が名もわが名も立てじ。」と「難波なるみつともいふな。」との関係は、順接である。厳密に言えば、「君が名もわが名も立てじ。」と、「難波なるみつともいふな。あひきともいはいはじ。」との関係が、順接なのである。

⑤逆接 前行段落Aの内容に、相応しない内容を、後続段落Bが叙述する関係をいう。反対、矛盾、不適合、意外、背反などが、この範疇に所属する。この関係を表示するのには、「シカシ」「ダガ」「ソレナノニ」「ケレドモ」「ニモカカワラス」などがある。第八図が、その模型図である。

〔実例一四〕年ふればよはひは老いぬ。しかはあれど花をし見れば物思ひもなし。

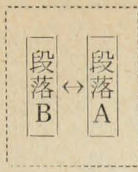
〔古今集〕一・五二。藤原良房



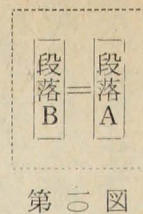
第八図

⑥対比 前行段落Aの内容と、後続段落Bの内容とを、対比、比較、対立させ、または、選択させる関係をいう。この関係を表示するのには、「マタハ」「ソレトモ」「ソレヨリハ」「トイウヨリハ」などがある。第九図が、その模型図である。

〔実例一五〕人づてに知らせてしかな。(ソレトモ) 隠沼の身ごもりにのみ恋ひやわたらむ。



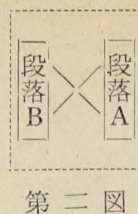
第九図



⑦同列 前行段落Aの内容と、結局は同じ内容を、後続段落Bで叙述する関係をいう。要約、反復、詳述、同格などが、この範疇に所属する。この関係を表示するのには、「ツマリ」「スナワチ」「タトエバ」「要スルニ」「ケツキヨクハ」などがある。第一〇図が、その模型図である。

〔実例一六〕わが恋は行くへも知らずはてもなし。(スナワチ)逢ふをかぎりと思ふばかりぞ。

〔古今集〕十二・六一一。凡河内躬恒



⑧転換 前行段落Aで、一つの内容が、いちおう完了し、後続段落Bでは、それとは別個の内容を叙述する関係をいう。すなわち、文章の内部で、話題が転換するわけである。この関係を表示するのは、「サテ」「トコロデ」「デハ」などがある。また、適当な接続詞や指示語がない場合にも、段落相互の関係は、転換であるとしてよい。

〔実例一七〕思ひつつ寝ればや人の見えつらむ。(トコロデ)夢と知りせばさめざらましを。(古今集〕十二・五五二。小野小町

〔実例一八〕春日野のとぶ火野の野守出でて見よ。(□)いまいく日ありて若菜つみてむ。

〔古今集〕一・一八

さて、文章の形式を、文章構成の基本形式によって理解することは、文論でいえば、文の種類を理解することに相当する。文の構造形式から、単文、複文、重文と、三種類に分類する。文章の構造形式から分類すると、二種六類に分類される。

また、段落相互の基本関係は、八種類に分類される。これを文論でいえば、文節相互の関係を、主語と述語との関係、修飾語と被修飾語との関係、対等の関係、補助の関係、独立語というふうに分類することに相当する。そして、文節相互の関係を理解するうえで、基本的に必要なことは、句(文節または連文節)が、どの句(文節または連文節)と対応するかということである。同様に、段落相互の関係を理解するうえで、基本的に必要なことは、どの段落とどの段落とが、対応するか

を、確実に把握することである。

論理と修辭 洋裁の言葉に、ロー・ウエストラインとか、ハイ・ウエストラインとかいうのがある。文法と洋裁とは、いささかながら、関係がある。

ウエストとは、人体で腰部と肋骨との中間部分を意味する。そして、ウエストの最も細い部分の一線をウエストラインと称する。つまり、ウエストラインは、上半身と下半身との境界線ということになる。上半身という段落と、下半身という段落と、人体における段落の境界が、ウエストラインだといってよい。

このウエストラインは、服飾のうえで、非常に重要とされている。特に、婦人服になると、ウエストが細いことによって、胸部と腰部とが強調される。すなわち、女性的な線が造形される要素である。そこで、ウエストラインには、ベルトを締めたり、胴接ぎ線（どうぎせん）を入れたりする。あるいは、ダーツ（つまみ）やボタンの配置で、表現されたりする。

ところで、洋服のウエストラインは、人体のウエストラインに一致するのが、普通であり、原則である。しかし、洋服全体のバランスに変化を求めたり、または、人体のアンバランスを修正するために、自然の位置とは別個の場所に、洋服のウエストラインを決定することがある。ウエストラインを、自然の位置より下げて製作する洋服が、ロー・ウエストラインである。そして、自然の位置より上げる場合を、ハイ・ウエストラインという。

したがって、洋服のウエストラインは、人体のウエストラインと、一致する場合もあれば、一致しない場合もある。換言すれば、服飾のウエストラインには、自然のウエストラインに、一致し、または、一致しない。

すなわち、人体における自然と、洋服における服飾とでは、上半身と下半身とが、必ずしも一致しないわけである。このようなことが、文章の段落についても、しばしば認知される。つまり、段落にも、論理的段落と修辭的段落とが、あるということである。

論理的段落と修辭的段落とは、一致することもあるけれども、また、一致しないことも少なくない。しかも、実際に発

表される文章は、修辭的段落によって、段落の区分がなされている。その修辭的段落が、論理的段落に一致しておれば、それで問題はない。しかし、修辭的段落と論理的段落とは、一致しない場合があるから、修辭的段落だけで吟味すると、文章の構造を、的確に把握しえない。

實際の文章では、普通、段落ごとに改行する習慣がある。だが、その場合、段落設定の基準は、通常、修辭的段落として設定されている。論理的基準によって設定されていても、それだけで、徹底し一貫している場合は、むしろ稀有といふべきであろう。

したがって、文章を文法的に処理するには、實際の段落に、眩惑されない配慮が必要となる。つまり、文章の構造を、論理的に把握し、段落の設定と段落相互の關係とを、論理的に理解しなければならぬ。

文章の筆者が設定するのは、形式的な段落である。形式的な段落は、論理的段落として設定されるとは限定できない。修辭的配慮が作用するから——結果的に論理的段落と一致するとしても——、本質的には、修辭的段落である。そこで、段落設定の形式に拘泥することなく、實質的な段落である論理的段落を、確實に把握することが肝要である。

〔実例一九〕④人間の個性の差別が、実にささいなことにまで現われるという一つの実例を、ついこのごろ見つけ出した。⑤ある研究所の廊下に、所員の姓名をしるした木の札がかけならべてある。⑥片側は墨で、片側は朱で書いてあるのを、出勤した時は黒字のほうを出し、帰る時は裏返して赤字のほうを出しておくのである。⑦粗末な白木の札であるから、新入りでない人の札は、みんな手あかです黒くよごれている。⑧ところが、人によっては姓名の第一番の文字のところだけに、まっ黒に指のあとをしるしている人があるかと思うと、また二番目の字をよごしている人もある。⑨そうかと思うと、また下の二字を一様によごして、上の二字はきれいに保存しているものもある。⑩一方ではまた、ちっともそうした汚点をつけていない人もある。⑪こうした区別が何を意味するかは、そう簡単な問題ではないであろう。⑫しかし、ことによると、この姓名札のよごし方の同じ型に属する人には、おのずから共通な素質があるかもしれない。⑬そうして、人間の性情の型を判断する場合に、このほうがむしろ手相判断などよりも、もっとはるかに科学的な典拠資料になりはしないかと想像される。』

⑧ 少なくともまっ黒な指のあとをつけている人は、名札のよごれなどということには、全然無関心な人であるというぐらゐのことは言われそうである。① わざわざあとをつけて、それが日々黒くなるのを楽しみにする人はめったになさそうに思われる。」

⑨ 気がついてみると、自分は一番上の字のまん中をまっ黒にしている。④ 同じ仲間が近所にふたりはある。⑩ このふたりと自分と、だいぶ似たところがあるらしい。⑥ 自分の場合では、かけた札がちゃんとうしろの板に密着しないと気持ちが悪いかから、かけたあとでバチンと札を押しつける。⑦ それを押しつけるには、くぎに近い上のほうを押すのが一番機械的に有効だから、そうするらしい。

⑧ もちろん、無意識にそうするのである。」

⑨ くぎに引っかけた札の穴の周囲を傷だらけにしている人と、そうでない人との区別もあるらしい。⑩ これとよこれ方との相関もあるらしいが、まだよく調べてみない。」

⑪ ともかくおそろしいことである。⑫ 「悪いことはできない」わけである。」

(寺田寅彦「名札」)

この文章の筆者は、この文章を、五個の段落に区分している。この区分は、実際の文章において、筆者の設定した段落の区分である。しかし、文章の内容を、検討し吟味すると、この区分が、必ずしも、実質的な区分でないことが判明する。論理的対応 この文章、実例一九は、「名札」について叙述してある。すなわち、「名札」が、この文章の主題であるということになる。

ところで、この文章は、二二個の文から構成されている。最小の段落が、一個の文から構成されることからすれば、この文章は、二二個の小段落から構成されるといってよい。

勿論、これらの小段落が、いずれも、主題と、直接の関係を保持するはずはないであろう。ある小段落は、文章の主題と、直接に関係づけられる。だが、ある小段落は、幾個かで段落を構成し、そういった小段落を内蔵する段落が、文章の主題と関係づけられる。そのような相違はあるとしても、それぞれの文が、それぞれ、段落を構成するわけである。そこで、これら最小の段落に、段落Aから段落Vまで、アルファベット順の記号を賦与しておこう。

さて、このような作業を前提として、これら小段落の相互関係と、文章の主題との対応関係とを、吟味して考察してみ

る。

まず、この文章は、文章の主題を展開するのに、二個の部分から構成される。第一の部分は、段落Aから段落Tまでの部分である。この部分は、名札について、筆者の観察しかつ考察したことを叙述する。第二の部分は、その観察と考察とに基づけられた、筆者の感想である。換言すれば、第一の部分から誘導された、筆者の結論ということになろう。

すなわち、この文章は、統合型文章のうち、二段型文章で、帰納型文章である。そして、段落Uと段落Vとの合体した段落が、統合段落ということになる。段落Aから段落Tまでが、説明段落というわけである。

説明段落は、具体的な事実によって、統合段落の理由を叙述している。そして、統合段落は、説明段落に立脚して、筆者の結論を叙述している。説明段落の叙述は、順当に、統合段落の叙述を誘導するといつてよい。すなわち、説明段落と統合段落との相互関係は、順接の結合である。この関係は、接続詞「だから」を想定させるであろう。

ところで、統合段落は、段落Uと段落Vと、二個の段落から構成される。段落Uと段落Vとの内容は、些細な事柄にでも、人柄が現われることに、慎しむ気持を抱たくことである。結局、段落Uと段落Vとは、同一の内容を、別個の表現で叙述している。この相互関係は、同列ということになる。

説明段落に相当する部分を、筆者は、四個の段落に区分している。この区分にも、理由がないわけではない。

筆者の設定した第一段は、段落Aから段落Jまでである。これを、形式的第一段としよう。筆者の設定した第二段、すなわち、段落Kから段落Lまでを、形式的第二段とする。そうすると、段落Mから段落Rまでが、形式的第三段、段落Sから段落Tまでが、形式的第四段である。

その場合、形式的第一段は、実例の叙述を内容とする。形式的第二段は、形式的第一段の補足的な説明で、形式的第三段は、筆者自身の行動についての反省ということになる。そして、形式的第四段は、事実の補足となろう。

このように考察すれば、筆者の設定した段落は、形式的な修辭的段落であるばかりでなく、実質的な論理的段落である

ように、印象づけられるかも知れない。だが、ここで、子細に吟味する必要がある。最小の段落は、文であることを想起して、段落の所屬と範圍とを、慎重に検討しなければならない。

ここで、特別に留意したいのは、段落Aである。「人間の個性の差別が実にささいなことにまで現われる」という、その「実例」を「見つけ出した」筆者が、段落B以下で叙述するのは、その「実例」である。その「実例」は、「ささいなこと」に現われた「人間の個性の差別」である。「ささいなこと」とは、名札の汚れであり、また、傷である。そこに、「人間の個性の差別」は、汚し方や傷のつけ方として現われている。――筆者は、観察と思考とを、そのように展開する。とすれば、段落Bから段落Tまでで、具体的な叙述が、展開しているわけである。すなわち、段落Aから段落Tまでで構成されるこの文章の説明段落は、段落Aと、段落Bから段落Tまでとに、二分される。そして、前者が、この説明段落を統合し、後者は、統合段落である段落Aを、具体的に説明する。前者と後者との相互関係は、解説で、「トイウノハ」といった接続詞で結合されてよい関係である。

ここで、一個の文から構成される段落Aは、一九個の文から構成される段落と、対応関係を保持するわけである。だから、この論理的な対応関係を、形式的にも踏襲するとすれば、段落Bで改行されなければならぬ。段落Aと段落Bとの境界は、筆者が設定した、段落Jと段落Kとの境界、段落Lと段落Mとの境界、段落Rと段落Sとの境界などよりも、はるかに決定的であるとしなければならない。

段落Bから段落Tまでに叙述される事柄が、筆者のいう「一つの実例」なのである。したがって、姓名の第一番の文字だけが汚れていたり、姓名の第二番の文字だけが汚れていたりするのは、「一つの実例」ではなくて、「一つの実例」のなかの一例でしかないのである。

このように、段落の対応関係を適切に把握し、段落相互の基本関係に即応して吟味するならば、「一つの実例」と「一つの実例の一例」とを、混同する可能性から、完全に解放されるであろう。段落の対応関係というものが、質的な対応で

あつて、量的な対応でないことを、十分に銘記しなければならない。そして、それが、文法的機能による対応関係であることは、自明であらう。

そして、筆者の設定した段落の区分に、惑乱しない配慮が必要である。自然のウエストラインに對立して、デザイナーは、ハイ・ウエストラインの洋服やら、ロー・ウエストラインの洋服やらを制作する。勿論、自然のままのウエストラインで制作することもある。

それぞれ、理由のあることには相違ない。しかし、いずれにしても、基本となるのは、人体における自然のウエストラインである。自然のウエストラインを中心として、上げたり、下げたり、そのままにしたりすることを、忘失してはならない。

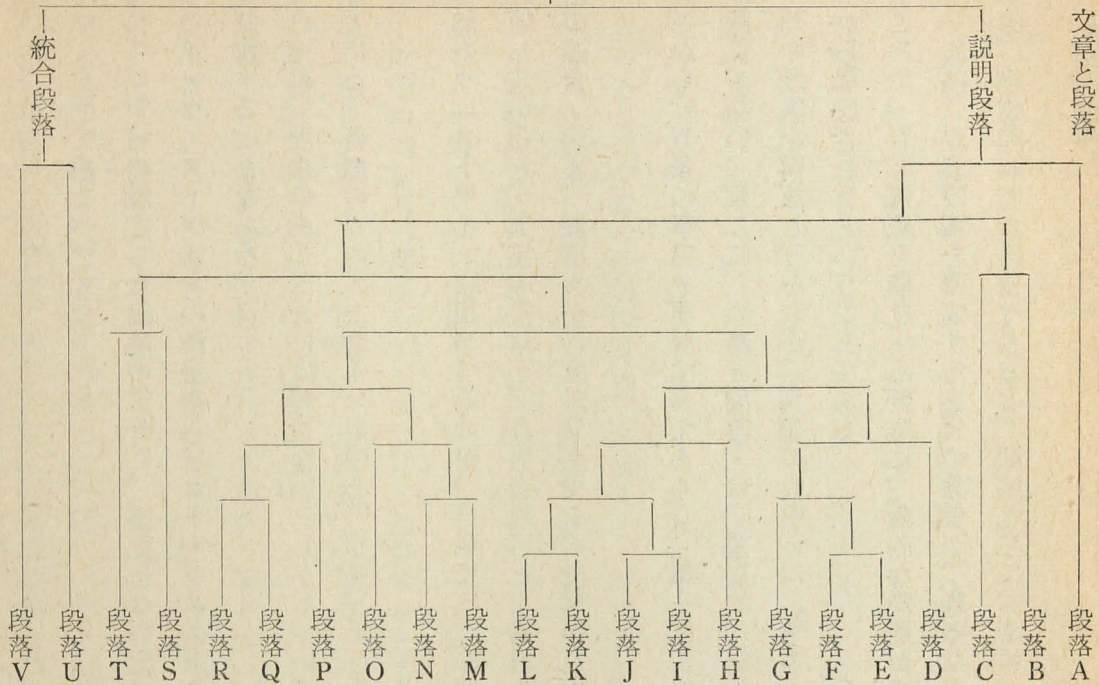
自然のウエストラインに相当するのが、文章では、論理的に設定される段落である。筆者というデザイナーの規定だけに追隨していると、真実の段落と、真実の対応とを看過してしまふ危険がある。

段落の連合 いま、段落Aから段落Vまでを、段落相互の対応関係から整理してみると、別掲第一三図のように図示する。

ここから、三条の事実を理解するであらう。第一に、対応する段落は、相互に、質的な対応関係を構成し、量的な均衡には関係がない。第二に、段落と段落とは、重層的に組織づけられる。対応する小さい段落と小さい段落とは、より大きい一個の段落を構成し、それが、別個の段落と対応するという機構になっている。そして、第三に、最小の段落は、一個の文から構成されるということである。

ところで、対応関係を構成する段落に、量的な均衡が成立しないとは、二種の均衡が必要でないことを意味する。

第一には、対応段落を構成する言語の分量が、雑多なことである。一文を構成する言語の分量が、不同であることからすれば、当然の事実であるけれども、順序として、まず、このことを確認しておこう。



第一三圖

つぎに、第二には、対応段落は、段落の数量に、関係がないことである。例言すれば、段落Aに対応するのは、段落Bから段落Tまでである。一個の段落と十九個の段落とが、対応関係を構成して、質的に匹敵している。

とすれば、この十九個の段落は、連合して一個の段落を構成し、段落Aに対応すると規定しうるのであろう。この段落連合が、規模を縮小して現出した事例が、段落Gに対応する段落Eと段落Fとの連合である。また、段落Dに対応する段落は、段落E、段落F、段落Gの三個が連合して構成する段落である。

この関係は、構文論における、文節と連文節との関係に相当する。文節と連文節とに、構文論的機能の相違はない。ただ、言語構造において、異同があるだけである。そして、連文節は、文節に区分することが、可能なのである。換言すれば、連文節は、文節の連合であり、文節が連合して、構文論的単位を構成するときに、それを、連文節と呼称する。

段落と文節とは、補助的単位である。補助的単位に、単位の連合が現出するのは、注目すべき事実であらう。

文節の概念を措定し、構文論的単位とすることには、疑義の介入する余地が多分にある。しかし、そのような単位を措定することは、必要としなければならない。そして、措定された単位が、いわゆる文節に相当する単位であることも、予想してよいはずである。

さて、こういった段落連合の思想を定立するとすれば、連合の基本となる段落ということが、当然、考察されなければならない。そしてまた、連合の極限についても、勘案される必要がある。

実例の吟味から、具体的に解明しえたように、文章を、段落としての性質を保存したままで、細分すれば、一個の文に到達する。すなわち、最小の段落は、一個の文で構成される。一個の文で構成される最小の段落が、段落連合の基本となる段落である。

そして、この連合は、文章という形式で統一される。すなわち、最大の段落は、文章を直接に構成する。文章が、段落連合の極限であるといつてよい。

段落という術語は、その概念が、厳密に規定されないで、世上に流布されている。その認定が、主観的な印象に基礎づけられ、そこから脱出しえない場合が、頻繁にある。——というよりは、それが、普通なのではあるまいか。

その原因は、この術語が、元来、修辭論的範疇で措定されたことにある。文法論の範疇が、在来の單語論と構文論とから拡大されて、文章論をも包含するようになったのは、近年のことである。文章論は、その端緒の開拓に、著手したばかりである。その場合、この術語が、厳密な吟味を経過しないで、流用されたのであった。その結果、段落の概念には、文法論においても、修辭論の規定の残滓が払拭されていない。

卑近な事例でいえば、文章を、幾個の段落に區別するかという作業についても、基本的な原理が、理論的に提示されていないのである。

いま、ここに、最小の段落が、一個の文で構成されると規定し、段落の対応に、段落の連合という思想を定立するなら

ば、この問題は、基本的に解決するはずである。そして、最大の段落が、文章として統合されるところならば、連合段落の構造は、それぞれ、文章構造の原理によって、理解されるであろう。

すなわち、文章構成の基本形式は、また、段落構成の基本形式でもある。勿論、その場合の段落は、連合段落を意味する。

文中の段落 最小の段落は、一個の文である。それが、段落設定の基本原則といってよい。修辭的段落、形式的な段落だけが、段落のすべてであれば、そのことに例外はない。しかし、論理的段落、実質的な段落ということになると、文中に、二個以上の段落を、設定しなければならないことがある。

一九五五年に、パリのデザイナーであった、クリスチャン・ディオールが、Aラインという婦人服の形式を発表した。これは、Aという文字の字面のように、全体のシルエットが三角形に広がって、ウエストラインを明示しないところに、その特徴があった。形式的なウエストラインを、否定するシルエットであるといえよう。

一個の文が、二個以上の段落から構成されるのは、いわば、Aラインの文である。Aラインの洋服でも、それを着用する人体には、ウエストラインがある。実質は、上半身と下半身とに区分されている。

ところで、文中に段落の境界があるといっても、そこには、やはり、法則がある。文中における段落の境界は、接続助詞によって把握しうるのである。接続助詞といっても、その全部ではない。接続助詞のなかで、列叙接続を表現すると説明される接続助詞がある。「て」「で」「つつ」「して」「に」「を」「も」「ものの」「ものを」「ものから」「が」などが、それに相当する。これらの接続助詞を境界として、前後二段に、段落が区分されることがある。

これらの接続助詞は、論理的にいえば、二文に分離して表現すべきところを、一文として表現するために、使用されるからである。

〔実例二〇〕玉たすぎ 歎火の山の 檀原の 日知の御代ゆ 生れましし 神のことごと 樛の木の いやつきつぎに 天の下 知

らしめししを 天にみつ 大和を置きて あをによし 奈良山を越え いかさまに 思ほしめせか 天離る 夷にはあれど 石走る
淡海の国の 楽浪の 大津の宮に 天の下 知らしめしけむ 天皇の 神の尊の 大宮は 此処と聞けども 大殿は 此処といへど
も 春草の 繁く生ひたる 霞立ち 春日の霧れる ももしきの 大宮処 見れば悲しも (『万葉集』一・二九。柿本人麿)

この、柿本人麿の作品は、文章全体、三十七句が、一個の文として構成されている。もつとも、第十五句「いかさまに」と第十六句「思ほしめせか」とで、一文を構成すると認定することも、可能であろう。しかし、この一文は、この文章を構成する一文に、挿入された一文である。すなわち、構文的成分の種類でいえば、独立語を構成する。したがって、その認定を肯定すると否定するとに拘わらず、一文で構成される文章という認定が、動揺することはない。

さて、この文章を、文章構造の基本形式から規定すると、統合型文章のうち、二段型統合で、帰納型文章であると、判定しうる。すなわち、第一句「玉たすき」から、第三十四句「春日の霧れる」までが、説明段落である。そして、第三十五句「ももしきの」から、第三十七句「見れば悲しも」までが、統合段落である。

説明段落は、過去を対象として表現した、第一句「玉たすき」から第二十四句「知らしめしけむ」までと、現在を対象として表現した、第二十五句「天皇の」から第三十四句「春日の霧れる」までと、二段に区分しえよう。さらに、前段は、第十句「知らしめししを」以前と、第十一句「天にみつ」以後とに、区分しうる。前者は、歴代天皇の事跡を対象とし、後者は、天智天皇の事跡を対象とする。

すなわち、この文章は、前後二段に区分される。そして、前段は、第一段と第二段とに区分され、さらに、第一段は、第一小段と第二小段とに区分される。そこで、細分した段落を、平面的に羅列すれば、森本治吉博士の説明するように、四個の段落から構成されるところとしてよい。^(註四)だが、それらの構成組織は、このように、重層的に理解されなければならないまい。

ところで、これら段落の展開を吟味すると、前段と後段、および、第一段と第二段とには、鎖型構文の技法が使用してある。鎖型に展開するために、段落の末尾で、文の終止が実現しない。第二十四句の「けむ」と第三十四句の「る」と、

および、後者と構文的に対等関係を構成する、第三十二句の「たる」とは、いずれも、段落末尾の述語を統括するとともに、後続段落を被修飾語とする修飾語の末尾を統括している。終結と連続と、両者の機能を、兼具するわけである。

段落と助詞 したがって、これらの場合に、段落の境界が、文の分離を現出しなかった動機は、文法論的契機よりも、修辭論的契機に基礎づけられるところが多である。ところが、これらに比較すれば、第一小段落と第二小段落との連続性は、相対的に、論理的契機に基礎づけられる傾向が著大である。無論、そこに、修辭論的契機の介在が皆無なのではない。しかし、前者にあっては、言語の特殊な二重機能が、特別に賦与されている。けれども、後者にあっては、言語の機能は、言語自体に具有するところである。

換言すれば、「けむ」「たる」「る」の二重機能は、それぞれの現場において、言語主体が、特別に賦与したものである。勿論、これらの言語に、その機能を荷担しうる能力が、潜在的に内在したことは、理解しなければなるまい。しかし、その潜在的能力を具現するのには、言語主体の修辭論的配慮を必要とする。

しかるに、「を」がこの文章で荷担している機能は、この言語、すなわち接続助詞「を」が、本来的に具有する機能である。したがって、言語主体が、この表現に関与しうるのは、この助詞を使用するか否かということではない。そこで、その限界において、修辭論的配慮が作用するといえよう。

けれども、「けむ」「たる」「る」の場合には、それらの言語を使用するか否かのほかに、それらの言語に特別の機能を賦与するという行為が、必要なのである。その機能を、文法論の範疇で説明することは可能であろう。しかし、顕在的な機能を抑制して、潜在的な機能を発揮させる表現方法と、顕在的な機能を利用する表現方法とは、区別して考察しなければならぬ。

そこで、鎖型構文による段落の連続性と、接続助詞による段落の連続性とは、区別して対象化する。すなわち、前者は、活用形の機能として設定されるものではない。単一形式による二重機能といった、広汎な視野から、懸詞や洒落とともに、

対象化されるべき事象である。したがって、文法論の関与する範囲は、その一端でしかない。ところが、後者は、接続助詞の機能として、一般的に対象化しうる事項である。とすれば、文法論の範疇で考察されるべきであろう。

素材概念の構成からすれば、二文で表現されるはずの事項を、言語表現の実態からすれば、一文で表現するところに、接続助詞の基本的な機能がある。ただ、子細に吟味するとき、そこには、二種の方法が適用されることを認知する。第一の方法は、複合法とも呼ぶべき方法である。そして、第二の方法は、接合法とも称すべき方法である。

接合法とは、接続助詞を、それに相当する接続詞に交替すれば、簡単に、二文に分離しうる方法である。例示すれば、「雨が降って、風が吹く。」は、「雨が降る。そして、風が吹く。」としても、言語素材の機構に異がない。複合法は、二文で表現されるはずの言語素材を、一文で表現する素材として、複合し、再構成して表現する方法である。例示すれば、「軽くて暖かいセーターを買ってもらった。」がそれである。これは、「軽いセーターを買ってもらった。暖かいセーターを買ってもらった。」といった二文で、表現することが、全然、不可能であるとはいえない。しかし、それでは、言語素材に、齟齬するところがある。

文の構造からすれば、接合法は、重文に適用され、複合法は、複文に適用される。すなわち、接続助詞による段落の分離は、いわゆる重文における接合法として、実現すると規定しなければならない。

最小の段落は、一文によって構成されるのが、段落認定の基本原則である。だが、文中の接続助詞が、接合法で使われるとき、句（文節）が、段落を構成するということになる。したがって、接続助詞の使用が、段落設定の徴表であるとは、必ずしも断定しえないわけである。

一般に、接続助詞は、先行句と後続句とを、対等の関係で接合する。その例外は、後続句が補助用言である場合に限定される。そこで、先行句と後続句との対立が、その文における述語の対立として集約される場合に、先行句と後続句とは、文章論的観点から規定するとき、それぞれ、段落を構成すると認定する。——そのように理解しうる。

(一九六六・一・一八脱稿)

註一、塚原鉄雄「国語の品詞分類」(『人文研究』第八卷第一号)。

註二、時枝誠記『国語学原論』(二二一ページ)。

註三、塚原鉄雄「続文法雑感―抽象と具体―」(『国語研究』第二七号)。

註四、森本治吉『万葉精粹の鑑賞』(上巻・七二ページ)。

〔後記〕段落相互の関係を論究したものに、永野賢氏の『学校文法文章論』(朝倉書店)と市川孝氏の「文章の構造」(『講座現代国語学』第二巻)とがある。なお、段落関係の体系組織と、論理的段落と修辭的段落との連関とについて論及する、紙幅の余裕がなかった。他日の機会に俟つ。

国語国文学研究室彙報(一)(一九六五年四月以降)

○一九六五年四月一日、森修助教授、教授に昇任。

○同年四月二九日、国語国文学会主催の新入生歓迎会を開いた。国鉄山崎駅に集合して、製油発祥の地である河陽離宮址の離宮八幡宮に詣で、資料館を見学、水無瀬神社において昼食、谷山教授の臨地講義があった。解散後、雨を冒して山崎の渡しに赴いた者も多かった。参加者二四名。

○同年五月三〇日、小島憲之教授の学士院恩賜賞受賞記念祝賀会が

小島教授夫妻を囲んで、催された。まず新大教室において、谷山教授の司会で開会、渡瀬学長の祝辞、恩師澤瀉博士の祝辞、小島教授の記念講演、記念品の贈呈があり、また、記念撮影の後、席を学生ホールに移して、中馬大阪市長の祝辞、市祝金の贈呈、来賓各位の祝辞、諸戸学部長の挨拶等があり、和やかな雰囲気の中、会を開じた。来会者は学内外の有志約二〇〇名。

○同年六月二四日、ハワイ大学教授ジェイムス・荒木氏の送別会を天王寺ステーションホテルにおいて開いた。参加者一〇名。